

時を超える舞台への探求心

有澤 晶子

執筆からおよそ半世紀をへて、未刊だった濱一衛による京劇の本が世にでた。一九三〇年代から五〇年代くらいまでに濱氏が実際に体感した京劇舞台上演と、文献の裏付けによる研究意識が急速に深化した中国の研究成果とを反映させた貴重な刊行である。

全体の構成は、「第一部著述篇」、「第二部翻訳篇」それに第三部「短文篇」からなっており、濱氏の京劇に対する溫蓄を多角的に知ることができる。著述篇には十章からなる「中国の戯劇」に加え、既発表論文「明清の戯曲」「中国の女方のはじまり」が収められている。翻訳篇には京劇の上舞台本翻訳が四本、話劇翻訳が一本ある。短文篇は短文四本からなる。主要部分を占める「中国の戯劇」は、

編者である中里見氏の分析によると、一九五六年京劇代表団による訪日公演にあって執筆がおこなわれたものとされる。梅蘭芳が団長をつとめた戦後初めての京劇公演であり、梅蘭芳にとっては三度目の来日だった。濱氏が北京に二年間留学したのは二五歳の一九三四年の時、それ以降何度中国へ足を運んだのかはわからないが、その後京劇来日公演を想定して執筆を勧められて書いたという『支那芝居の話』（一九四四）があり、役者や劇場の把握ぶりは、濱氏が劇場に足繁くかよう様を彷彿とさせるものであった。どんな舞台を観たのか、公演や役者の様子がありありとわかり、濱氏が役者の特徴や変化をよく観察していることに驚いた記憶がある。そして一九五六年に

濱一衛著訳／中里見敬整理
濱一衛著訳集

中国の戯劇・京劇選



A5判 362頁
花書院 [4900円]

書かれたこの長文「中国の戯劇」は、視野を地方劇に広げて京劇を位置づけながら、具体的な事例によって深く京劇の専門的な世界に読者を導こうとしている。そこには独得な表象の表現への濱氏のあくなき研究心が積み重ねられている。

さらに特徴的なのは、京劇を論じながら、その節々に日本の芸能への意識が随所で顔をだし、京劇を日本の芸能にフィードバックしながらイメージを膨らませることができるようになっていくことである。濱氏の目は、常に日本と中国の表象の間を往復している。この書は、濱氏の後の名著『日本芸能の源流——散楽考』（一九六八）に結実するその端緒を

側面からわからせてくれるものでもある。日本の芸能が中国と深いつながりがあることを、具体的な資料を用いて論じることができたのは、それぞれの本質を文獻的にも実践的にもとらえることができたからにはかならない。

論述の全体をとおして、舞台を作る側の意識で、演出の約束事が説き明かされていく。特に「理解が浮かないように」するために、具体的に一つの演目「汾河湾」(唐代、薛仁貴が一八年ぶりに帰還する途中、過って殺めた子が実の息子と知り、妻柳迎春と悲嘆にくれる場面)を例にして、読者は舞台の幕開きから詳しい解説をリアルタイムで受けながら観劇していくような手順ですすめられて、衣装や小道具などの一般的な約束事も網羅している。演技のきまりごとにも具体的な説明がほどこされる。それは、濱氏が実際に観たもののほか、役者による芸談および当時欧陽予倩らが雑誌に発表していた論述などをほぼ同時に吸収し文中に反映させている。

加えてあたかも上演制作者の立場に立ったかのように、舞台裏のさまざまな習慣や決まり事にも関心をよせている。一例をあげると、今ではすでになくなっ

てしまった楽屋内の習慣で、舞台で使用する物品を管理する職掌の人たちの働きやその給金、習慣におよぶものまで細かに記述している。もちろんそれは濱氏がいかに取材したというわけではなく、参考資料から推測するに、梅蘭芳の舞台の創作演出にたずさわった齊如山が楽屋でさまざまな舞台関係者に取材してかきとめたものや、中国演劇の歴史を文献を中心にまとめた周贻白による著述などをもとにしていることがわかる。あるいは日本のかくこにあたる「検場」が廃止されようとする過程をとらえていたり、「交作」とよんだ舞台裏の細分化された專業によつて構成されていた劇団の形が崩壊してスター制になっていく過程なども記され、歴史の変遷の貴重な記述にもなっている。

その関心の細部へのこだわりは、濱氏

■(財) 日中友好会館 第21回中国文化之日
大草原からの響き 2011

—フルンボイル民族歌舞劇院公演とモンゴル族の暮らし展

【公演】フルンボイル民族歌舞劇院公演

▼日中友好会館大ホール(文京区後楽一—五—三)▼10月21日(金)19時/22日(土)13時半、18時半/23日(日)13時半 *各回公演の30分前より開場▼全席指定/前売一、〇〇〇円(空席があれば当日券一、二〇〇円を販売)▼チケット発売・チケットぴあ(電話予約受付 ☎0570・02・9999/インターネット <http://ptai.jp/> Pコード:14826)▼主催・財日中友好会館

【展示】モンゴル族の暮らし展

▼日中友好会館美術館(文京区後楽一—五—三)▼9月30日(金)/10月23日(日)*水曜休館▼10時~17時(公演期間は、上演終了後まで開館)▼無料

【関連イベント】(申し込み不要。展覧会会場へ直接こ来場下さい)

▼民族衣装を着てみよう 10月1日(土)、8日(土)、15日(土)13~13時半

◆ホーミーミニ講座 10月21日(金)15時

▼お問合せ…財団法人日中友好会館 文化事業部(平日9時~5時)(☎03・3815・5085 / enai@nanka.jp)

の舞台への愛着と探求心を反映している。劇場を一つの世界として、そこで生きる人やその中でおこるあらゆる現象を知り尽くさないではいられなかったのであろう。個々の術語名称の由来などにもさりげなくふれて、それが生まれる根本的な要因や現象への関心も示している。

たとえば、人物を典型化する役柄という表現は、中国では欠かせないが西洋演劇にはない表現形態で、「脚色行当」という術語がつかわれる。その語源の由来は、科挙の試験を受けるときに、自分の履歴を書いて提出するが、その履歴を書くことを意味する一語が援用されたのであると述べている。様式のなりたちをとらえようとする演氏の好奇心と関心のありようがわかるものである。

また、実際の役柄と結びつけてその解説は論じられている。一例をあげると、老旦という役柄が、当時はなり手がなかなかったが、その存在は舞台にいきいきとした活気をもたらし重要性をもったものであったことがわかる。

さらに、伝統的な演技動作はきまりに偏りその心が理解されないようでは浅い演技になるが、同時に演技の特徴は誇張にあり、それなくしては伝統ではなくなる、といった現状の傾向への苦言を呈したり、あるいは演出家の必要性についても語っている。

「明清の戯曲」の中で注目している一人、清初の劇作家李漁の存在は、演氏の志向と合致している。「このような舞台用の作品を書く作家が、清初に至って再び生まれたことは注目されてよい」とし、「増大した観客数、それに対する本の供給のために、近松のような人が出はじめた」という位置づけをおこなっている。

「京劇でも脚本を読む」と舞台で見るのとは大違いなのである」という演氏は、翻訳篇では京劇の脚本を訳すことのマイナス面も重々承知したうえで翻訳をおこなっている。具体的には「霸王別姫」「打漁殺家」「汾河湾」「桑園寄子」の四本で、いずれも当時から現在に至るまで常演される演目である。

翻訳にあたってその選択は「私達日本人が見て面白いと思ひ而も常に上演されているものを拵んだ」とするが、演氏自身、台本は演じるのを目的としているため、「戯曲そのものは大した価値はない。俳優の芸を通して始めて興味が湧く」とし、京劇脚本が文学的な価値が低いことは、もとよりよく自覚している。演氏の眼前にはすでに舞台上の役者が想像でき、耳には京胡や歌唱が響いていたのであるまいか。四本の演目はいずれも舞台上演した場合にふんだんに表象の特徴が盛り込まれた味わい深い演目である。

演氏にとって「霸王別姫」は、「いつ迄も印象に残るのは「虞や虞や汝を如何にせん」の悲婉雄壮の念と、虞姫の起って舞う十二場の舞剣である、太鼓雲鑼等の伴奏で舞う虞姫の姿は天上のものかと疑う程である」といった思い入れを記した演目である。あるいは「桑園寄子」では、「子供が足の痛みを訴え交る背負うところや、衣を撕き指を咬んで血書するところなど誠に悲惨で直視するに忍びな

い」と舞台上の演技を心に刻んでいる。実際、これらの演目は、場面の情景を容易に想像させ、象徴表現という特徴をきわめて強く表現できるものである。

京劇の台本は多くの場合、役者によるきわめて象徴的な型の演技で見る人に想像させながら、それと全く相反するリアルな表現が時々顔をだす特徴をもっている。それが文字面だけで情報をえる読者にとつては、どのような印象を与えることになるのか、濱氏ははじめから想定している。翻訳文体はリズム感を重んじた歯切れのよいものとなり、上演に適している。せりふのことは遊びや妙味は訳しみて新たな発見がある。だがあくまでも読み物として味わうものではなく、役者の演技を想像し場面の状況を思い浮かべてはじめてその情趣が実感できる。

この翻訳をとおしても、濱氏はまことに芝居を愛し探求してやまなかった人であつたということが如実にわかる。魅惑も欠点や問題点もすべて掌中にしていたのである。

以前、濱氏の全容を知りたくて九州大学の演文庫を合山究先生のご厚意で見せていただいたことがある。刊行物の他に未刊の原稿や濱氏のメモ、濱氏の集めた雑誌や写真が積まれていた。目録は詳細に作られているが、実際に濱氏が心血こめて書いたり集めたりした文献が埋もれたままなのは、宝の山を前にしてなすすべもなくながめるだけのようで、とても残念に思った。その後ずっと宿題を残したような気がして気がかりであつた。今、中里見氏の手によってそれが甦つた。蒐集品や写真、未定稿の文章を整理するのは大変骨の折れる仕事であり、それを整理し時を超えて生命を吹き込むのは容易なことではなかつたことと想像される。文章に即した舞台写真の選択配置は、理解を助ける有効なものとなっており、編集者中里見氏の事宜にかなつた判断が光っている。

「支那劇に対する一通りの知識を持ち二三回辛抱して聴けば、一見喧噪な様な音楽も段々静かに響き、落ち着いて鑑賞

出来よう。支那劇の生命である唱の面白さが解るまでは暫くかかるとしても、俳優の芸の旨さ、表徴化の面白さに感心し、伝統芸術の偉大さに打たれるであろう」。濱氏の文章にはこの熱い思いが共通して流れている。

(ありさわ・あきこ) 東洋大学

■「台湾現代詩ワークショップ」第3回
新しい詩の世界をもとめて

▼10月1日(土)14時半～18時半／▼キャンパス・イノベーションセンター東京四階四〇八号室(東京都港区芝浦三―三一六) ☎03・5440・9020 (東京工業大学田町キャンパス内) URL: <http://www.cic.tokyo.jp/access.html> ▼無料
▼主催…台湾現代詩研究会／後援…思潮社／お問合せ…三木直大(広島大学大学院総合科学研究所／E-mail: naomiki@hiroshima-u.ac.jp)

【第1部 講演と質疑】 鴻鴻・許悔之・陳育虹(司会：三木直大・佐藤晋美子)

【第2部 朗読と交流】 鴻鴻・許悔之・陳育虹・杉本真維子・野村喜和夫・蜂飼耳(司会：池上貞子・松浦恆雄)

※12時半より、鴻鴻監督映画「壁を抜ける少年・The Wall Passer」(中国語字幕版、二〇〇七年台湾)を上映。